



卓 話



「奥の細道」を歩く

日本経済新聞社 生活情報部 編集委員
土田 芳樹氏

江戸時代の元禄2年（1689年）、俳人・松尾芭蕉が約5ヶ月かけて歩いた「奥の細道」を、昨年5月15日から同じ時間をかけて歩きました。旅立ちは東京・深川で、結びの地の大垣（岐阜県）には、10月3日に到着しました。所要日数143日、歩いた距離は1767kmで、いつも腰に付けていた万歩計は280万歩をカウントしていました。



芭蕉が旅した300年以上も昔とは、道路も宿も通信手段ひとつとってみても様変わりしていて比較になりませんが、季節感だけは共有できたと思っております。「青葉若葉の日光」や白河関に近い遊行柳の「田一枚植えて立去る柳」の緑は実に鮮やかでした。「五月雨をあつめて早し」の最上川は、ちょうど梅雨時で増水、モスグリーンの水面に渦が巻いていました。

奥の細道最北端の地、象潟（秋田県）はマラソンでいえば折り返し点です。そこから日本海に沿って南下しますが、鼠ヶ関からの越後路は300kmと長く、時節も夏真っ盛りです。芭蕉は「暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」と書いていますが、炎天下を歩かねばならないこの区間が、私にとって最もきつかった。芭蕉の心境がよくわかりました。

奥の細道は一説に「600里2400km」といわれていますが、実際に歩いて測った限りではそんなではありません。国土地理院発行の2万5000分の1の地図を180枚用意し、1km（地図上は4cm）ごとにしるしをつけました。誤差はあるでしょうが、長くて1800km前後だといえます。ですから、芭蕉の旅の記述のなかで疑問に思えることがいくつもありました。

航空機や新幹線、高速道路が走る現代に、1700kmを歩いて旅するという企画を打ち出した舞台裏にも簡単に触れておきましょう。私の勤務する日本経済新聞で、昨年5

月、夕刊に新しい面「こころのページ」が生まれました。儲かる、暮らしに役立つ、といった従来の実用情報とは違って、こころに訴える、琴線に触れるような記事を、というのが新紙面のコンセプトでした。

戦後生まれの団塊の世代がまもなく定年を迎え、社会の第一線から退きます。世間では2007年問題といわれていますが、日経においても中核的な団塊世代の読者をつなぎとめることが、重要な経営課題になりつつあります。読者のターゲットが熟年なら、書く側もシニア記者を動員しようということになったわけです。その裏には、「給料分働け」という社の意向もあったようです。

編集会議を何度か重ね、「歩いて会得」をキーワードに、連載企画として「奥の細道」を歩く、が決まりました。もっとも、当初は一人の記者が歩き通すというのではなく、全行程を20区間に分け、4、5人の記者が駅伝のタスキをつなぐように交代で歩く、というものでした。しかし、統一性がとれないという理由から、結局、一人で歩くことになりました。

奥の細道の旅を終わっての感想、結論は、連載紙面の総集編で書きましたが、もういちど紹介しますと、①日本は狭くない②国土は緑一色③地方は貧しくない——の3点です。もう一つ加えれば、「人間の2本の足はたいしたものだ」ということでしょうか。旅のはじめには足の裏がマメだらけになり難渋しましたが、歩けば歩くほど体がなじんでいくのがよくわかりました。

3つの結論はいずれも、いまの日本の常識に反していますが、①は時間距離とは異なるもう一つの尺度（価値観）を持っていいのでは、ということです。②は大都市を一歩離れれば緑したたる瑞穂の国を実感できます。俳句の季語に「万緑」という言葉があります。遊行柳から白河関にいたる道で「緑の海を手こぎ船で進む」、そんな錯覚にとらわれました。

最後に③地方は貧しくない、です。これは経済的、物理的なことがらというよりも、精神的なものです。確かに、地方都市では“シャッター通り”が目立ち、高齢化も行き着くところまでいった感じです。それでも、出会った人たちの多くが、その土地に暮らしていることに強烈な自信と誇りを持っているように思いました。歩き旅の楽しさは、そうした人々との出会いでもあります。